

書 評 と 紹 介

山根純佳著

『なぜ女性は ケア労働をするのか ——性別分業の再生産を超えて』

評者：矢澤 澄子

近代工業社会／近代家族において一般化した男性＝賃労働、女性＝家事労働という性別分業を問い直し、その解消により男女の不平等の是正を目指すことは、現代フェミニズム実践の基本的なテーマとなってきた。サービス経済化・少子高齢化が進む脱工業化社会においては、家事労働の外部化が進む一方で、「他者を世話し、気遣う」という生命・生活・仕事の再生産にとって欠かせない育児・介護・看護等のケア労働の需要や負担が増している。今日、社会経済の持続的発展の基本要件として、ケア、ケア労働をどのように位置づけ（承認・評価し）、ケアの平等化にむけて男女（ジェンダー）間、公私の諸主体・行為者（世代、エスニシティ、階層）間でこれをどのように公平に配分するかは、フェミニズムの理論実践を超えた社会政策上の喫緊の課題となっている。とりわけ性別分業による「女性のケア労働の負担」をいかに軽減するかは大きな問題であり、国内外で活発な議論や取り組みが続いている。

本書は、「なぜ女性はケア労働をするのか」（「なぜ女性はケア労働者になるのか」）という

現代フェミニズム・ジェンダー研究上の基本的問いに向き合い、最新の研究成果を基に性別分業の下で主に女性が行なってきたケア労働（「依存的存在としての他者を世話する労働」）について理論的に考察し、ケア労働をめぐる性別分業の解消に有効な政策課題（方策）にも言及した研究書である。今日、ケアをめぐる性別分業はグローバルな再編過程にあり、男女間、女性間での差異（格差）と多様性を伴って「家庭から労働市場に拡大して」いる（2-4頁、以下数字のみ記す）。著者はそうした現実を捉え、ケア労働（本書の対象は主に育児、介護）をめぐる性別分業が拡大・再生産・変動するメカニズムと、これを規定する構造としての「言説・資源構造」（諸構造）の体系的な解明を試みている。

著者の理論的視点のコアにあるのが、ポスト構造主義フェミニズムの理論家ジュディス・バトラーの「エージェンシー」概念（1990＝1999）を批判的に再構成した「行為者の能動的実践」としての「エージェンシー」という鍵概念である（25-32）。著者は、行為者としての女性・男性が家庭の内外で行なうケア労働を「行為者の構造に対する解釈にもとづいた能動的実践」（「エージェンシー」）と定義する。そして、ケア労働をとおして行なう多様な「交渉実践」による、性別分業の再生産と変動の可能性を多方面から探っている（ii）。

本書前半（1-3章）では、国内外の先行研究の系譜（「物質的構造論」「主体的選択論」等）の批判的検討と、ケア労働・性別分業をめぐる近年のジェンダー分析の2つの潮流（言説分析と資源・機会配分分析）の整理を行ない、「エージェンシー」概念を基軸とした本書の分析枠

組みを提示する。後半（4－6章）では、家庭での子育てと労働市場でのケアワーカーの高齢者介護に焦点を当て、ケア労働をする行為者の多様な能動的交渉実践（エイジェンシー）による性別分業の拡大・再生産・変動のメカニズムについて考察している。

各章の内容を概観しよう。第一章「性別分業の再生産論の到達点と課題—『能動的実践』とは何か」では、研究の分析枠組みを明らかにするための主要な先行研究として、江原由美子のジェンダー秩序論（2001）を取り上げ、社会学の構造化理論等（「言説による実践の構造化」）によって性別分業再生産メカニズムの解明を試みたその理論を批判的に検討する。そして、江原の「カテゴリー還元論の乗り越え」を目指して、本書のテーマに迫る上で有効とされる主な基本概念、「エイジェンシー」、「構造」「権力」「実践」等の意味関連を提示する（74：表1-1）。

第二章「性別分業再生産におけるエイジェンシー—なぜ女性は家庭に入るのか」では、マルクス主義フェミニズムの「家父長制」理論（女性はケア労働を強いられるとする「物質的構造論」）の限界を検討した上で、「稼ぎ手」男性の存在を前提とした近代家族における「世帯単位の合理的選択」として女性が「家庭に入り」、性別分業を再生産するエイジェンシー（再生産実践）について、2つの「構造」（「資源」「言説」）との関係から明らかにする。

第三章「言説に対する批判的解釈実践—なぜ女性はケア責任を重視するのか」では、「ケア＝女性の責任」とするキャロル・ギリガンの実証研究やケア倫理学の議論（「女性は主体的にケア労働を選択している」とする「主体的選択論」）を批判し、「ケア労働からやりがいを得られない」「負担が大きい」など「多様な声」の再検証から、「ケア＝女性の責任」とする言

説に対する女性の「批判的解釈実践」が、性別分業を問い直し、変動を促す契機ともなることを示す。

第四章「家庭における交渉実践と変動—ケア労働の配分をめぐる交渉と権力」では、本書前半での考察を基に、まず社会学者アーネとローマンによるスウェーデンの夫婦間におけるケア労働分担の実証研究（1997＝2001）に依拠し、家庭における男女の権力資源、権力作用、交渉実践、意識の多様性を明らかにする。また船橋恵子の育児をめぐるジェンダー・ポリティクスの国際比較研究（2006）を基に、家庭でのケア分担をめぐるさまざまな夫婦間の交渉実践の変遷を検証し、女性が経済資源を得ることにより交渉力を獲得し、平等なケア分担の実現によって実際に性別分業を変化させていることを明らかにする。それらをふまえ、家庭における女性の交渉実践により性別分業にどのような変動の可能性があるか、またその構造的限界とはなにかについて理論的整理を行なっている（205：表4-2）。

第五章と第六章では、筆者が行なったケアワーカーへの面接調査のデータ解析から、日本の労働市場におけるケアワーカーの交渉実践と構造の変動・再編過程を考察する。第五章「女性ケアワーカーの交渉実践」では、女性の実践をとおした「ケアの社会化」の事例として、既婚女性（主に被扶養の主婦）が担う福祉ワーカーズ・コレクティブの実践をとりあげる。そして女性ケアワーカーの交渉実践が、日本のケア労働市場におけるジェンダー構造をどのように変えるのか（変動の可能性）について論じる。第六章「男性ヘルパーの交渉実践と性別職域分離」では、介護職という女性職に参入した男性ヘルパーの交渉実践をとりあげる。ここでは介護保険制度実施後のケア労働とジェンダーをめぐる言説の変動や、性別職域分離の再編過程につい

て論じる。一方で、著者は2事例の考察の帰結として、「これらの女性、男性ケアワーカーの実践も、男性稼ぎ手構造のもとで女性が家計補助的に働くという資源配分構造を変えるものではない。また介護労働の低賃金構造は、男性の介護労働への参入、継続を困難にしている」(281)と指摘し、日本の労働市場におけるケア労働が、家庭と労働市場の双方で温存されている性別分業のマクロ構造の制約下にあることに言及している。

終章では、これら変動を制約する「構造」(「性別分業」)の「性支配性」について考察し、「ケアをめぐる性別分業の拡大・再編」という現象に対して、「よりよいケアの社会化」に向けて求められる課題を示す。まず家庭における性別分業の性支配性とは、女性の「選択の結果の不利益」と男女の「交渉力の格差」として現出しており、性別分業はその意味で「結果の不利益」と「交渉力の格差を伴った分業」であるとする。またケア労働市場のジェンダー構造については、家庭の性別分業構造を介して「低賃金＝非正規労働＝女性労働」というジェンダー構造が再生産されており、他方では「ケア労働市場のジェンダー構造が、家庭における性別分業を再生産している」ことを指摘する(286-289)。

ではこの「家庭と労働市場の構造の再生産関係」、つまり性支配の循環的關係性を断ち切る方策とはなにか。マクロな社会構造について著者は、①女性の労働の価値を低く評価するジェンダー化された評価構造の見直し、②賃金格差の是正と社会保障制度の見直しによる男女間の経済資源配分の是正、③ケアサービスの社会的整備によるケア資源配分の是正、④「働き方の見直し」(ワークライフバランス)による時間資源配分の是正の4点をあげる(289-291)。またケアの社会化、制度化が進む介護労働市場

の構造については、①生活賃金の保障、②労働者の権限の再配分、③専門性の階層格差の解消の3つの方策(政策課題)をあげている(291-293)。これらの方策は、これまで日本の女性労働問題研究やジェンダー視点に立った社会福祉・社会政策研究等の分野で、多くの論者がマクロ・ミクロの実証的データに基づき導き出してきたジェンダー平等達成への方策と一致するところも多く、評者も(細部の議論は別として)これらの方策の意義や必要性について異論はない。

本書は、「なぜ女性はケア労働をするのか」というリサーチ・クwestionsを明確にした上で、その解明に体系的な視点と分析枠組みをもって意欲的に取り組んだ研究書である。また終章では、日本の家庭と労働市場の現実をふまえた政策課題にも言及しており、フェミニズム理論の継承を目指す著者の実証的・政策的問題関心にも期待がもてる。

最後に、評者が感じた若干の疑問点について述べる。疑問点のひとつは、上記に要約した終章での結論的考察や方策への言及が、1-4章までのエイジェンシー概念を導きの糸とした理論的考察の内実とどう関係づけられるのかという点である。終章での考察とここで言及されている方策は、主に5-6章での日本の介護労働をめぐる現状分析から導かれたものである。これらと、1-4章までの子育て・介護を包摂した女性のケア労働全般と性別分業をめぐる内外の先行研究の批判的検討、そこから導かれた理論的考察との関連づけは必ずしも明確ではない。終章では、本書前半で提起された著者独自のエイジェンシー概念を核にすえて、行為者の「解釈実践」「交渉実践」と「諸構造」の間にある現実の深い溝を埋めるどのような「能動的実践」の展開がありうるのかについて改めて問い、「エイジェンシー」の視点から両者を橋渡しす

るための、より掘り下げた理論的考察や論証が欲しかったように思われる。

ふたつめは、本書が対象とした子育てと介護の、ケア労働としての差異と共通性について、著者の理論的実証的認識がどこまで明確にされていたかという点である。言うまでもなく、ケア労働、女性のケア労働負担の様相は、時代とともに大きく変化し、また各国、地域における制度・政策・慣行上の位置づけはさまざまである。本書が対象として論じた子育て・介護にも、制度・政策・慣行上や行為者相互間の関係性の特質にはひと括りに論じられない多くの差異（多様性）が内包されている。それらの差異や共通性の理論的解明には、ケア労働をめぐるエイジェンシー概念のさらなる彫琢、つまり「解釈実践」「交渉実践」「構造」等主要概念の現実分析に資する分節化や概念間の関連の明確化、国際比較研究の積み重ねなどが求められよう。

本書が掲げる「なぜ女性はケア労働をするのか」という問いをめぐる考察は、「女性、男性はどんなケア労働をどのようにするのか」をめぐる新たな今日的問いへの探究を経てより深められていくのではないかと思われる。

今日、少子高齢化の下で、性別分業をめぐる言説の変化や女性雇用の拡大、ケア労働（子育て、介護）の市場化、制度化がグローバル／ローカルに加速している。著者は、能動的行為者

（女性、男性）によるケア労働の実践が「男性、女性のアイデンティティや価値」を変化させ、行為者のケア実践の積み重ねは「性別分業の変動力となる」と明言する（284）。本書をとおして著者は、変化する時代潮流と性別分業の下にあるケア労働の諸困難を見据えながら、ケア労働の平等な配分を志向する未来への希望のメッセージを発している。この点においても本書は、「ケア」「ケア労働」「よりよいケアの社会化」や「性別分業」をめぐる今後の学際的議論や実践に一石を投じる社会学的探究の書といえよう（i—iii頁、序章）。

（山根純佳著『なぜ女性はケア労働をするのか——性別分業の再生産を超えて』勁草書房、2010年2月刊、xxii+305頁、定価3,300円＋税）

（やざわ・すみこ 元東京女子大学教授）

参考文献

- Ahrne, Goran and Hemmett Christine Roman, 1997=2001, 日本・スウェーデン家族比較研究会訳『家族に潜む権力—スウェーデン平等社会の理想と現実』青木書店
- Butler, Judith, 1990=1999, 竹村和子訳『ジェンダー・トラブル—フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社
- 江原由美子, 2001, 『ジェンダー—秩序』勁草書房
- 船橋恵子, 2006, 『育児のジェンダー・ポリティクス』勁草書房